

中国電影大觀

★★★



## ただいま(過年回家 /Seventeen Years)

2007(平成19)年11月3日鑑賞(シネ・ヌーヴォ)

監督・製作・編集=張 元/出演=劉琳／李野萍／梁松／李 涓／李冰冰 (K 2 エンタテインメント配給／1999年中国、イタリア合作映画／89分)

…… 1982年の北京郊外の胡同は……？ その17年後は、一体どんな風景に……？ そして、16歳の女の子が17年間の刑務所生活を余儀なくされた原因とは……？ 映画後半の一時帰宅を許されたヒロインとかわいい主任さんとの2人旅から見えてくるものは……？ そして、父子と母子の再会という感動のクライマックスとは……？ 第6世代監督を代表する一人張 元監督が描く、家族の絆の姿にきっとあなたも涙するはずだ。

### ■張 元監督に注目！

第6世代監督代表には、賈 樟 柯、張 楊、陸 川らがいるが、趙 薇が1人2役を演じて姜 文と共に演した『緑茶』(02年) (『シネマルーム11』199頁参照) と、徐 静 蕾と佟大為の夫婦ゲンカの様子を描いた『我愛你』(03年) (『シネマルーム11』264頁参照) というすばらしい作品の監督が張 元。

1963年生まれの張 元監督は『媽媽』(90年)でデビューし、この『ただいま』で1999年の第56回ベネチア国際映画祭銀獅子賞(監督賞)を受賞したこと。そんな張 元監督の昔の名作を「中国映画の全貌2007」で鑑賞することに……。

### ■英題の意味するものは……？

この映画の邦題『ただいま』は、原題『過年回家』と似たような意味で、ある一面からこの映画の本質をついたもの。しかし、英題『Seventeen Years』は全く別の視点からこの映画をみたタイトル……。

Seventeen Years =17年とは、この映画のヒロインの陶蘭(劉琳)が殺人罪によつて女子刑務所に入っていた期間のこと。陶蘭は16歳の時義理の姉子小琴(李涓)を殺した罪で刑務所に入ったから、後に登場する刑務所主任の小潔(李冰冰)が言うように、まさに16歳から33歳までの女性として最も輝く時期を刑務所内で過ごしたことになる。

もっとも陶蘭は今も刑務所に入っており、刑期はあと残り1年。この映画は、模範囚の陶蘭が旧正月の3日間だけ一時帰宅を許されたことによって生まれる人間ドラマを感動的に切りとったもの。さて、あなたは邦題か原題と英題のどちらが好き……？

## 1982年 vs. 1999年、北京の胡同は……？

この映画が公開され、ベネチア国際映画祭銀獅子賞（監督賞）を受賞したのは1999年。映画とは便利な芸術で、いとも簡単に時代を操作できるから、この映画は前半の時代から後半の時代へ「17年後」という字幕1つで移行していく……？ といっても、時間的には前半が4分の1で、後半が4分の3くらいの割合……？

後半の時代設定が1999年だとすれば、17年前の時代は1982年ということになる。すると、改革開放政策がとられたこの17年の間に北京のまちが大きく変わったのは当然。去る10月7日から11日まで、2003年11月に続いて2度目の北京旅行をしてきた私は、2008年8月の北京オリンピックを控えた北京のまちの最新の変貌ぶりを見学してきたが、まちの変化の激しさは郊外部も同じはず。今回の北京旅行で私ははじめて天安門から西北の方向にある前海、中海、後海そして鼓樓、鐘樓周辺の胡同と四合院を見学してきたが、この地域の変化も急だった。

この映画の主人公たちが住んでいる北京郊外の〇〇区がどこにあるのか私にはわからないが、その地区の住宅(胡同)が1982年から1999年までの17年間で大きくつくり変えられ、次々とアパートに建て替えられていったことは当然。そういう、胡同の変化という視点から父子の確執を見事に描いた映画が張元と同じ第6世代監督である張楊の『胡同のひまわり』(05年)だったが、『ただいま』の前半に登場する胡同の風景はそれと全く同じ。

さて、そんな胡同の中で主人公たちはどんな営みをしていたのだろうか……？ そしてなぜ、殺人罪という恐ろしい事件が……？

## 『レ・ミゼラブル』は銀の食器から

ピクトル・ユーゴーの小説『レ・ミゼラブル』は日本タイトル『ああ無情』として大人気の小説だが、劇団四季がミュージカル化した『レ・ミゼラブル』は上映2000回を超える、『キャッツ』『ライオンキング』『オペラ座の怪人』『美女と野獣』に次ぐ歴代5位の大ヒット作となっている。したがって、主人公ジャン・バルジャンや敵役ジヤベール警部の名前そしてコゼット、ファンティーヌ、マリウスなどの名前は広く日本人に知れわたっている。そしてまた、この物語は、ジャン・バルジャンが銀の食器を盗んだことに端を発することもよく知っているはず……。

## こちらのコトの発端は、5元札から

それと対比するわけではないが、『ただいま』でコトの発端となったのは5元札。  
フートン  
胡同の中の小さな家に住んでいるのは、互いに連れ子を伴って再婚した親子4人。スクリーンを観ていると、この夫婦仲、姉妹仲が微妙なバランスの上に成り立っていることがよくわかる……。

自転車に乗っての夫婦の買い物出し（？）が終わり、食材とともに釣りの5元札はあそこに置いたはず……？ ところが、翌朝その5元札が見つからない。5元札に羽根がはえて飛んでいったのか……？ そんなバカなことはありえない。するとそこで母親は、「羽根ははえなくても人間の手があるからね……」と何とも意味深な発言を……。

父親の連れ子である義姉の小琴は大学を目指して一生懸命勉強している優等生風の美人だが、さてそのハラの中は……？ 他方、母親の連れ子である陶蘭タウランが家を嫌っていることは小琴と同じだが、その行動は直截的……？ 高校を卒業したら工場に住み込みで就職し、絶対こんな家には戻らないと小琴に話していた陶蘭タウランは、遊び回っているばかりで何事にもチャランポラン……？

母親の発言が発端となり、それなら徹底的に調べたらいいだろう、と事態はエスカレート。そんな中、布団をめくると何とそこに問題の5元札があったから大変。そしてその布団は、当然（？）陶蘭タウランの布団。これは一体ナゼ……？ この映画は犯人探しのミステリーものではないから、張元監督はスクリーン上で堂々とそのタネあかしをしている。したがって、その犯人を知らないのは父親と母親そして○○のみ

……？ さて、こんな5元札事件から翌日の殺人事件に発展するのだから、5元札をめぐるちょっとしたハプニングがすべてのコトの発端……。

## 【映画】かわいい主任さんはしっかり者

映画の前半登場していた義姉の小琴は、5元札事件の翌朝学校へ行っている時、後から追いかけてきた陶 蘭<sup>タウ・ラン</sup>が道端で拾った天秤棒で殴られたことによって死んでしまったから、以降出番なし。それに代わって後半陶 蘭<sup>タウ・ラン</sup>の相棒として登場するのが、女子刑務所の主任さんである小 潔<sup>シャオジエ</sup>。緑色の制服姿が凛々しい主任さんだが、私の見るところ、その細面の顔立ちとスラリとした体型は小琴と雰囲気がそっくり。

ただ、小琴は少しづが今までいじわるそうだったが、今27歳でもうすぐ28歳になろうという小 潔<sup>シャオジエ</sup>は、政府を信じ刑務所の囚人たちの更生を信じている真面目でしっかり者の女性。そんな主任さんも、今年は旧正月を故郷で過ごすことができると聞いて、大喜び。しかし、列車の切符を買おうとした時、小 潔<sup>シャオジエ</sup>の目にに入ったのは……？

## 【映画】後半の女2人の旅の中、どんな人生ドラマが……？

陶 蘭<sup>タウ・ラン</sup>と共に一時帰宅を許された囚人たちはみんなうれしそうに故郷へ向かって行ったのに、なぜか陶 蘭<sup>タウ・ラン</sup>だけは駅の待合室で1人座ったまま。それを発見した小 潔<sup>シャオジエ</sup>は、陶 蘭<sup>タウ・ラン</sup>の故郷を尋ねると自分の故郷のすぐ近く。そこで小 潔<sup>シャオジエ</sup>は一緒に行ってあげると提案。尻込みする陶 蘭<sup>タウ・ラン</sup>の手を引っ張ってバスの中へ。さあ映画後半、これから始まる女2人の旅の中に、どんな人生ドラマが……？

## 【映画】第1のドラマは再開発と取り壊し

17年間も埠の外の世界をみていない陶 蘭<sup>タウ・ラン</sup>が何かと尻込みするのは当然だが、それに代わって小 潔<sup>シャオジエ</sup>は何ゴトにも行動的。しかし、やっとたどり着いた陶 蘭<sup>タウ・ラン</sup>の故郷の胡同は、今は再開発のために取り壊され何とも無残な状態に。これだけでも北京郊外の再開発の問題点は十分わかるのだが、私としては張 楊監督の『胡同のひまわり』のように、もう少しその問題点を掘り下げてほしいと思ったが……。

1人立ちつくす陶 蘭<sup>タウ・ラン</sup>に代わって小 潔<sup>シャオジエ</sup>は駐在のお巡りさんに問い合わせて陶 蘭<sup>タウ・ラン</sup>の両親の移転先を確認。さあ、これから再度移転先に向けて出発だ。こんな移動の中、女子トイレに関するちょっとおもしろいシーンがあるので、それをお見逃しなく。こ

んなシーンを観ると、中国女性のトイレのやり方がよくわかるというもの……？

## ■ 第2のドラマは水餃子……？

スクリーンを見ていると、**小潔**はとにかくよく歩く。**陶蘭**は仕方なく（？）その後についていくだけだが、そんな強行軍の甲斐あって夜遅くやっと移転先の近くまで到着したようだ。

そして、多分そこで朝から何も食べてなかったことに気づいたのだろう。目に入った屋台でおいしそうな「水餃子」を注文し、2人でフーフーしながら食事することになったが、そこで出たのが**小潔**と**小潔**の家族とりわけ父親との確執。こんなに眞面目で前向きな女の子にもやはり内心こんな悩みがあったのだということがはじめてわかったため、**陶蘭**もそして私もビックリ。やはり寒い中での熱い「水餃子」は、人の心を開かせるもの……？

## ■ 第3のドラマは輪タクのおじさん……？

水餃子を食べながら「輪タクはいませんか？」と聞いたが、明日には旧正月を迎える夜、みんな店じまいだと言われたため、**小潔**と**陶蘭**は食事が終わるとさらに歩く速度を速めていった。すると、ちょうどそれを追いかけるように通りかかったのが、「屋台で輪タクを探している」と聞いた、「家族からお呼びがかかったので迎えに行くところだ」という輪タクのおじさん。「ふつうは3元だが、行き道だから2元でいいよ」と言うおじさんの言葉は人情味タップリで、北京の郊外にまだこんな人情味が残っているのかと思わず感心……。

もっとも、こういう運に恵まれるのも、ひたむきに**陶蘭**が努力しているおかげだと私は思っているが……。

## ■ クライマックスの再会シーンは……？

さあ、刻一刻と**陶蘭**の両親のアパートは近づいてきた。町はあちこちあの中国の旧正月特有の爆竹の音でいっぱいだ。**小潔**がドアをノックすると顔を出したのは母親の**陶愛栄**。そこで**小潔**が、「刑務所から一時帰宅の案内を出したが、引っ越しのため配達されなかったようだ」と説明したが、それに対する**陶愛栄**の反応は……？

部屋の中に入ると、父親の于正高は母親以上にビックリしたよう。単純に「おかえ

り」とならないのは、17年ぶりの再会だから仕方ないだろうが、それ以上に何かよそよそしさと、ぎこちなさを感じたのは私だけ……？ 陶蘭<sup>タウ・ラン</sup>がシャワーを浴びに行ったのも、小潔<sup>シャオジエ</sup>が「私は実家に帰ると、何よりもまっ先にシャワーを……」を言ってくれたため。そして、食事を用意する母親と話しているうち、小潔<sup>シャオジエ</sup>にみえてきたものは……？

これ以上書くのはやめておこう。なぜなら、ここから始まる母子と父子の再会シーンがこの映画のハイライトだから。そしてまた、ここまで陶蘭<sup>タウ・ラン</sup>を連れてきた小潔<sup>シャオジエ</sup>ですら、その途中自分の役割は終わったとしてそっと席を外し、一人やっと自分の故郷へ向かうことになったのだから。

このクライマックスシーンには『ただいま』という邦題がいかにもピッタリ。第6世代監督張元<sup>チャン・ユアン</sup>が描く家族の絆の姿をじっくり心ゆくまで堪能したいものだ。

## ■ 1つだけ苦言を—16歳と33歳を1人では……

『見知らぬ女からの手紙』(04年)は、徐靜蕾<sup>シュー・ジンレイ</sup>が1人で学生時代の主人公とそれから8年後高級娼婦となった主人公を演じたが、1974年生まれの彼女にとって、それは自然に演じられるギリギリの年齢設定。しかし、この映画で同じく1974年生まれで公開時25歳の劉琳<sup>リウ・リン</sup>が、16歳の陶蘭<sup>タウ・ラン</sup>と17年後の33歳となった陶蘭<sup>タウ・ラン</sup>を演じているが、残念ながらそれはちょっとムリがある。

張元監督がどうして劉琳<sup>リウ・リン</sup>にそんなにこだわったのかわからない（単に予算上の問題だけ……？）が、やはり16歳と33歳はよく似た雰囲気の2人の女優を使った方が良かったのでは……？

2007(平成19)年11月20日記